

「日本人の家族」

伊藤 真

ITO Makoto

私が小学6年生だった1977年春、ロンドンの大英自然史博物館で「人類」をテーマとする大規模な企画展が開幕した。その入り口付近に飾られていた世界各国の人びとの等身大写真パネルの中に、両親と弟と私の一家4人の姿もあった。日本企業の駐在員として一家でロンドンに暮らしていた父の職場に、撮影に協力してくれる家族はいないかと博物館から打診があり、もの好きな父が真っ先に手を挙げて、私たちが「日本人の家族」として被写体になったのだ。

博物館に展示されたパネルを両親と見に行った際、私はサッカー・チーム「マンチェスター・ユナイテッド」のデザインが入ったお気に入りのバッグを持っていた。パネルの前で記念写真を撮ろうとすると、父は「日本人の家族なのにそんなバッグを持っているなんて、けったいやな」と笑った。その時、私はなぜか少しムツとした。おそらく父との間に意識の「ずれ」があったからだと思う。父にとって一家のアイデンティティは「日本人」という点にあった。だが私にはそれよりも「マンチェスター・ユナイテッドのバッグを持っている」ことのほうに意味があり、それを「けったい」と言われたのが心外だったのだと思う（当時の日本人の男子小学生は巨人か阪神の野球帽というのが一般的なイメージだっただろう）。

そんな親との「ずれ」を感じた体験がもう一つある。英国の地元の小学校に通っていた私は家に帰っても弟と英語を使ってはしゃいでいた。するとある日、「うちでは日本語でしゃべりなさい!」と母に注意されたのだ。いずれ帰国したときに日本の学校や生活になじめないと困るからと、以降、家族内では英語を使ってはいけないことになった。母の気遣いとしては当然のことだったろう。しかし私は釈然としなかった。好きなテレビ番組もコミック誌も英語だし、学校を中心に生活の大半が英国式なのに、家族内では、普段ほとんど意識することのない「日本人」として、日本語を使わなければならないのだ。日本に「帰る」ことは当時の私にはリアリティがなく、6年生の夏に帰国することになった時も、いつか英国に「帰ってこよう」と思っていた。

そんな少年のナイーブな思いが透げられることのないまま、まもなく半世紀。私が今、国籍という法的な属性として「日本人」であることには多くの点で合理性があり、そこに不満や疑問はない。しかしより広い意味で、私たちが家系や出身地などによって家族単位で（あるいはもっと大きな単位で）「日本人」と規定され、それに伴う規範のようなものにも従わなければならないというのは、どうしたことだろうか？ うまく問いを整理できないが、少年時代に感じたもやもやは、心の底に澱のよう^{おり}に残っている。マンチェスター・ユナイテッドのバッグを持っていることを「けったい」と言われてムツとした私は、今は夫婦と2人の子供とで「日本人の家族」を形成している。国際結婚や移民などで「日本」の家族のあり方も多様化している中、私の家族のメンバーの間に、「日本人の家族」であることについて意識の「ずれ」はあるだろうか？ 改めて家族と話してみたくなった。